造林地の「つる」を活用した有効な特定事業の実施について

山形森林管理署○渋谷勝彦
高橋誠
志田友之
渋谷恒太郎
佐藤利三

1　はじめに

当山形森林管理署は，山形県の内陸部中央に位置し蔵王，月山，山寺など多くの観光地を抱えております。

これら観光地の道路沿線の造林地には「つる」が繁茂し，環境整備として「つる」の除去等を地域より要請され，観光地を抱える署の悩みの一つでありました。

特に，温泉とお釜を擁し全国的にも有名な観光地として知名度が高く，入り込み者も多い蔵王山系は，比較的「ぶどうづる」が多く，これの除去を兼ね特定事業の「つる細工」制作を実施したので，その取組みの経緯と成果について発表します。

2　実施個所並びに取組みの経緯

「つる細工」の制作は，西川町の中心部から約２３キロ南西，寒河江ダム上流大井沢地区にある中村森林事務所真向かいのプレハブ車庫２階で行っております。

大井沢地区は１１０戸程の集落で，県内でも有数の豪雪地帯であり，林業，農業を中心とした生活で国有林に対する依存度の高い地区であります。

当地区では，昔から特産品として「つる細工」制作が盛んで，冬期間の現金収入源として重要な地場産業の一つであり，ここ数年前より大井沢のブランド品として全国から注文が相次ぎ，生産が追いつかない状況にあります。

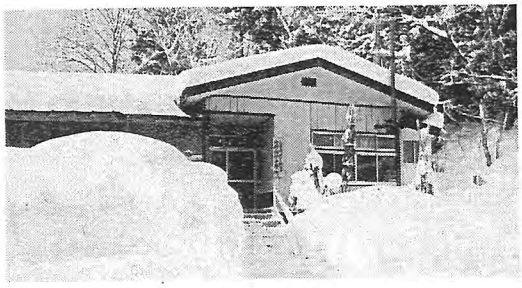
そこで，当事務所基幹作業職員４名全員が「つる細工」の経験があること，また，平成９年度まで冬期間は生産事業を実行していましたが，要員の大幅な減少に加え有効な資材の減少傾向が顕著となったため，生産事業の継続が困難となったことから，冬期事業の掘り起こしを余儀なくされ特定事業として取り組んできました。

3　制作方法等

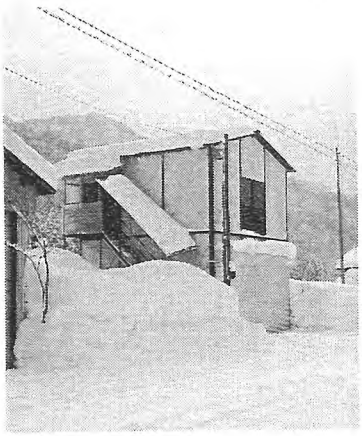
私達が所属している中村森林事務所です。署がある寒河江市から南西約４１km，西川町大井沢地区にあり，冬期は積雪が３ｍを越え，外での作業は殆ど出来ません。（写真１）

森林事務所の真向かいにある車庫の２階が私達の作業所です。（写真２）

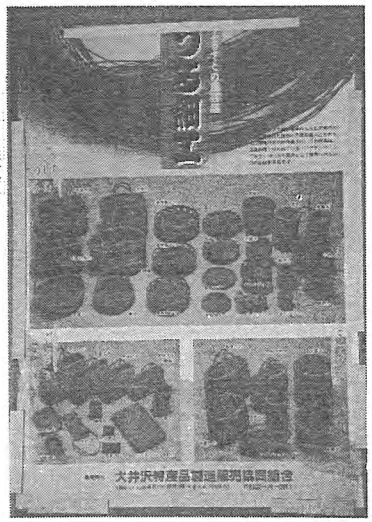
大井沢ブランドの「つる細工」製品の数々です。地区全体では名刺入れや一輪挿しなどの小物から，手提げ篭やくず篭に至るまで数多くの製品を作っております。（写真３）



（写真１）



（写真２）

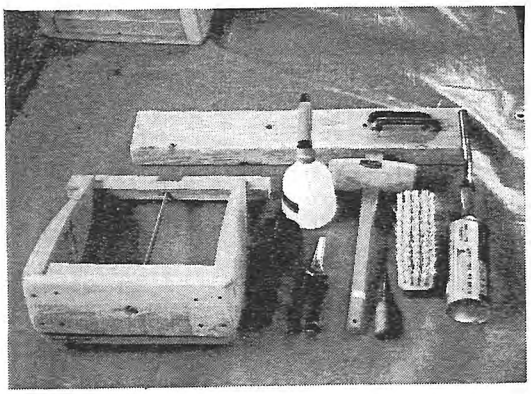


（写真３）

（写真４）

私達が作っている製品の一部です。主として制作しているぶどうづる製品で，大と中の手提げ篭です。（写真４）

制作に使用する道具類です。上段はつるの鞣しに使う道具で手作りです。下段左から型枠，これも手作りです。皮剥ぎ，霧吹き，ハサミ，木槌，目通し，皮のケバを立てるブラシ，ケバを焼くガスバーナーです。（写真５）



（写真５）

材料となる「ぶどうづる」は，６・７月に皮の部分のみを剥ぎ取ったものを保存し乾燥しておきます。（写真６）

保存していた「ぶどう皮」を水に浸して少し柔らかくした後，制作する篭の大きさに合わせた幅に切り分けます。（写真７）

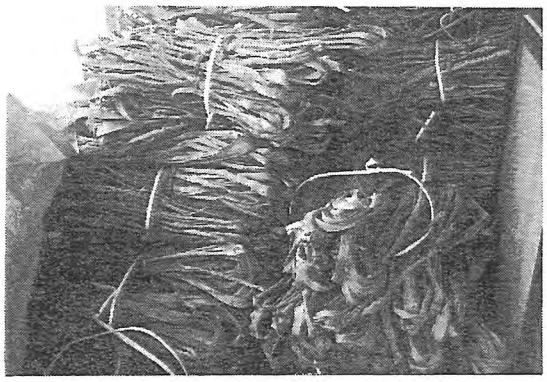
幅切りした「ぶどう皮」は，更に篭の大きさに合わせた長さに裁断します。（写真８）

篭の大きさ毎に揃えられた「ぶどう皮」は，編み作業に入る前に角材にカスガイを２本打ち込んで自作した鞣し器で鞣し，皮の表面に残っている堅い外皮や節皮などを

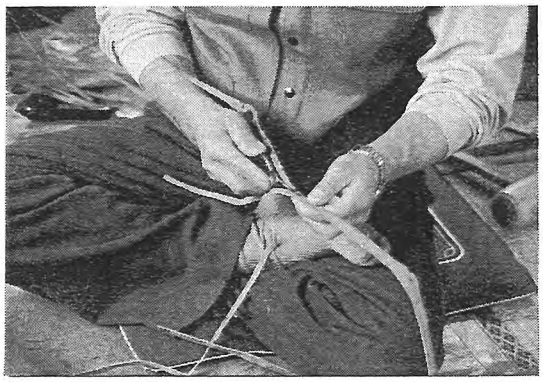
取り除きながら柔らかくします。（写真９・１０）

鞣しの段階で，採取時期が遅れた二重皮などの不良品は取り除きます。（写真１１）

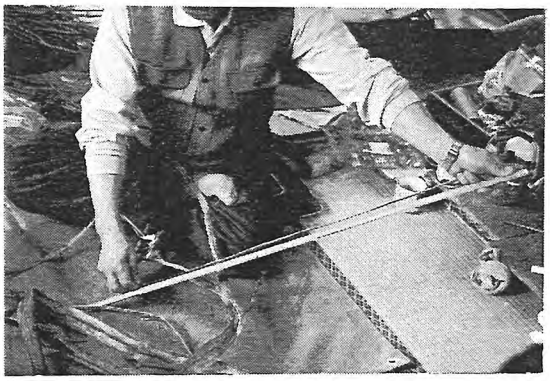
鞣して柔らかくされた皮は，制作する篭の大きさ毎に束ねておきます。（写真１２）



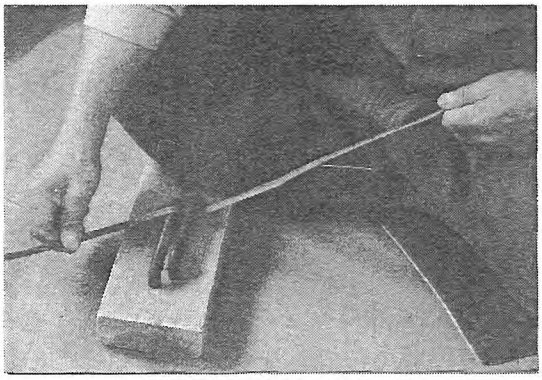
（写真６）



（写真７）



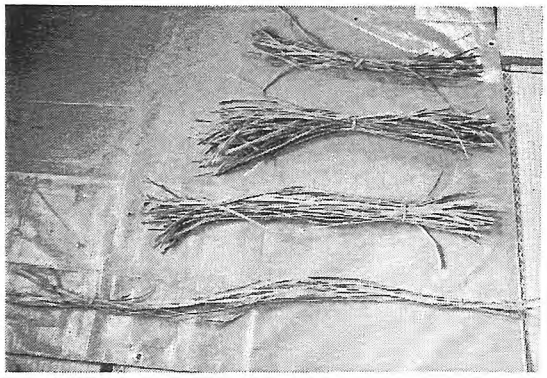
（写真８）



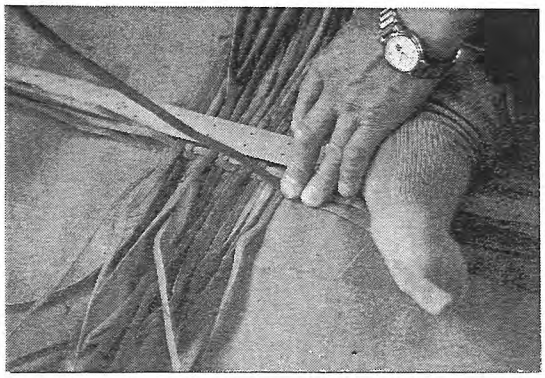
（写真９）

（写真１０）

（写真１１）



（写真１２）



（写真１３）

篭編み作業は底編みから始めます。まず，皮をあじろ編みに編み込み，編み上げる篭

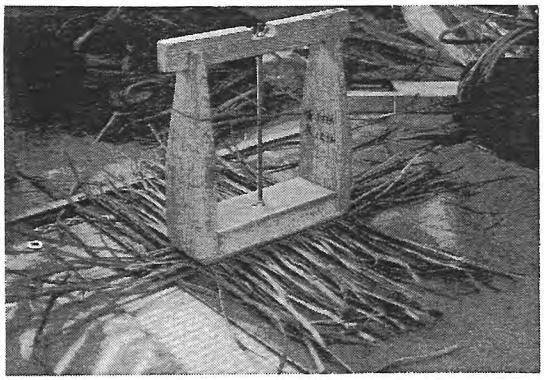
の大きさに合わせた底編みをします。（写真１３・１４）

底編みを終えたら型枠に取り付け，底板を打ち込み固定します。（写真１５～１７）

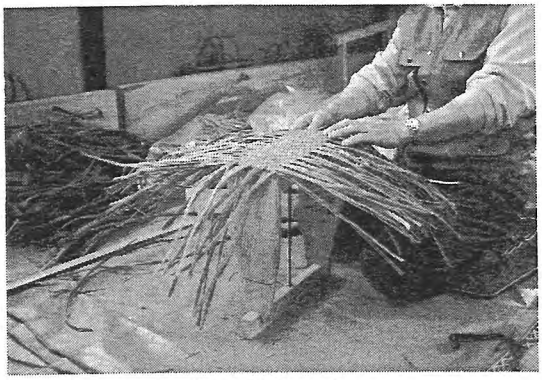
篭の側面を編み始めているところです。（写真１８）

編んでいる途中でハサミで皮の幅を手直ししたり，木槌で打ちながら形を整えていきます。（写真１９）

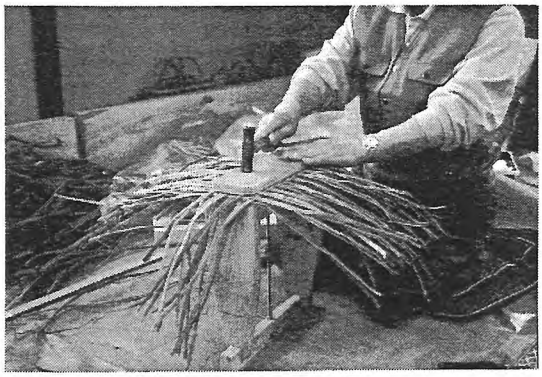
（写真１４）



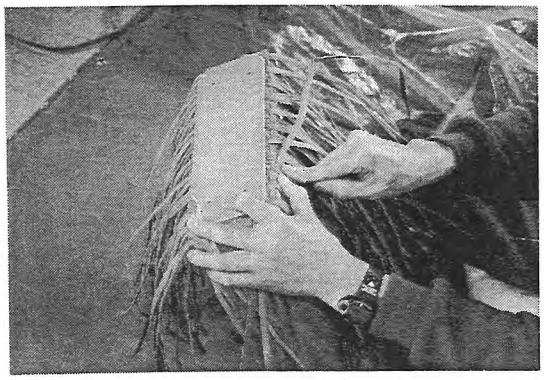
（写真１５）



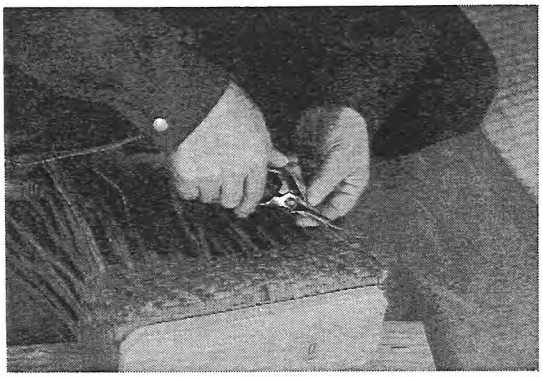
（写真１６）



（写真１７）



（写真１８）



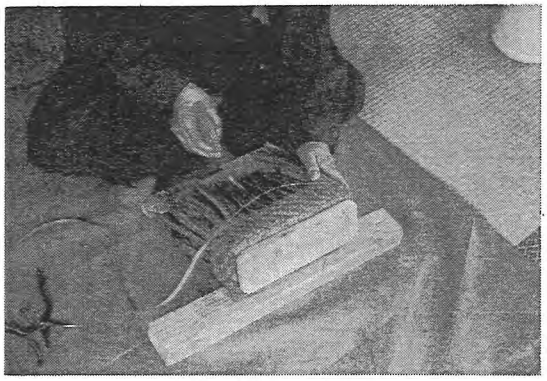
（写真１９）

また，皮が乾燥して堅くならないように霧吹きで湿らしながら編み込みます。（写真２０）

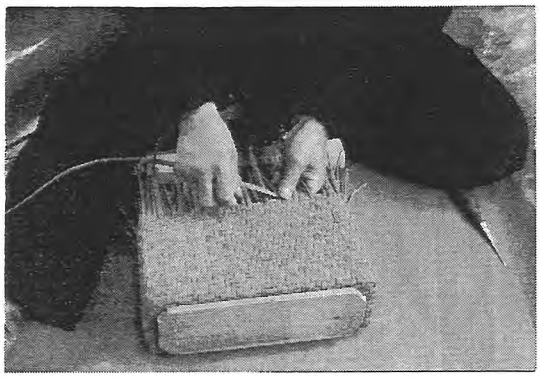
篭の中断まで編み込んだところです。（写真２１）

篭枠全体が編み終わったら底板を取り外します。（写真２２）

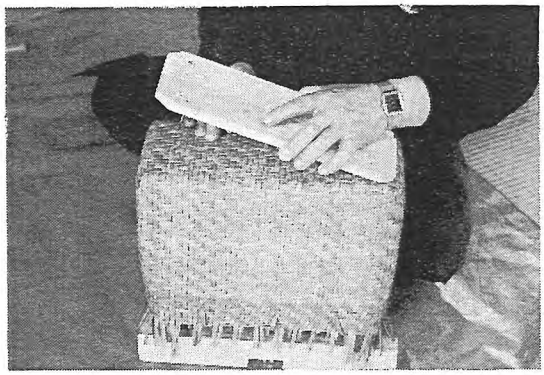
次に型抜きですが，枠を固定しているネジを外して片方の枠を取り外してから，残りの枠を抜き取ります。（写真２３・２４）



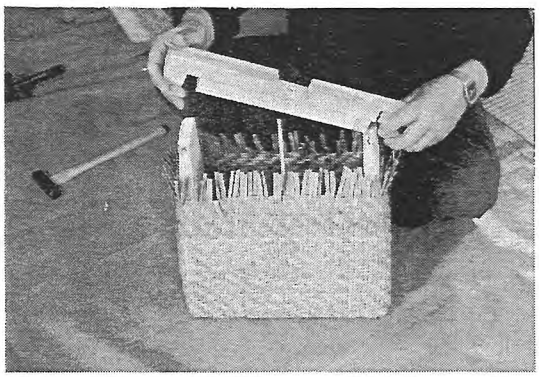
（写真２０）



（写真２１）



（写真２２）

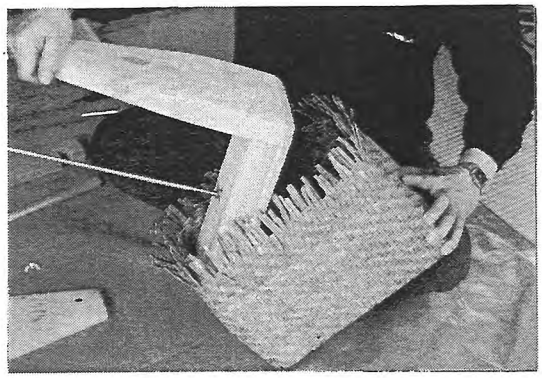


（写真２３）

型枠を抜いた篭は，糸で縁かがりします。（写真２５）

縁かがりした後は，余分な皮を裁断し縁を揃えます。（写真２６）

縁揃えが終わったら縁編みをします。（写真２７）

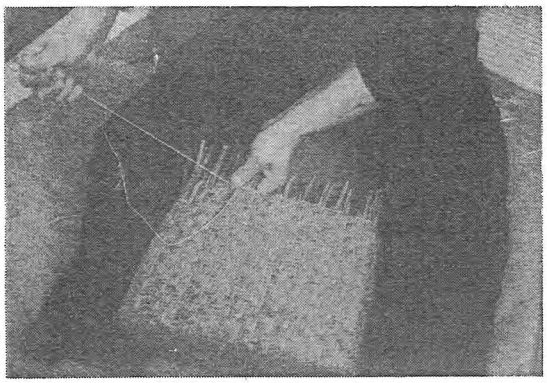


（写真２４）

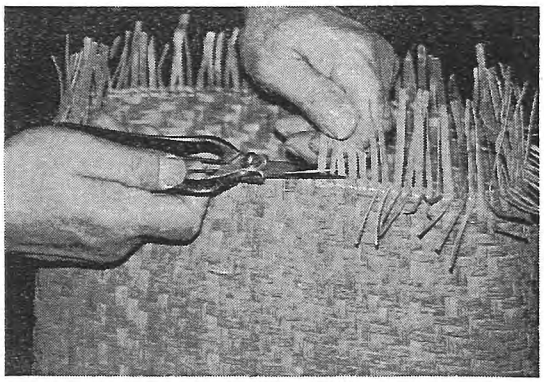
編み上げの最後に手を取り付けます。取っ手の皮を取り付けた後，皮を巻き付け取っ手が出来上がります。（写真２８）

仕上げ工程は，ブラシで皮に磨きを掛けながら表面のケバ立てをし，ケバをガスバーナーの火で焼き落として完成です。（写真２９・３０）

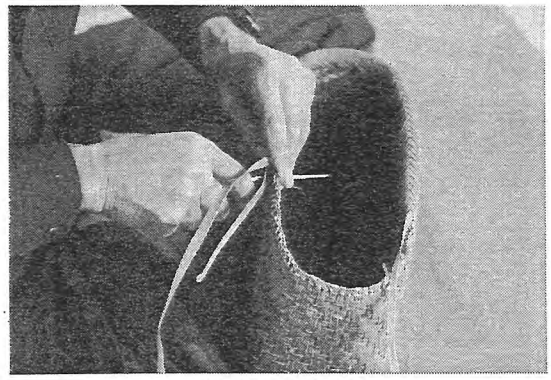
これが完成品の「ぶどうづる手提げ篭」です。（写真３１）



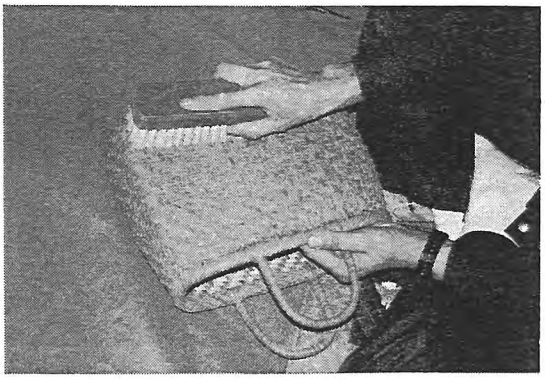
（写真２５）



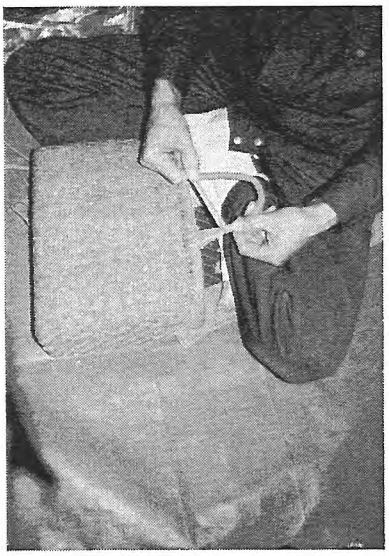
（写真２６）



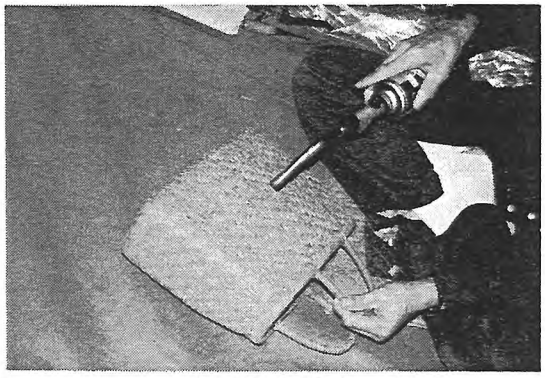
（写真２７）



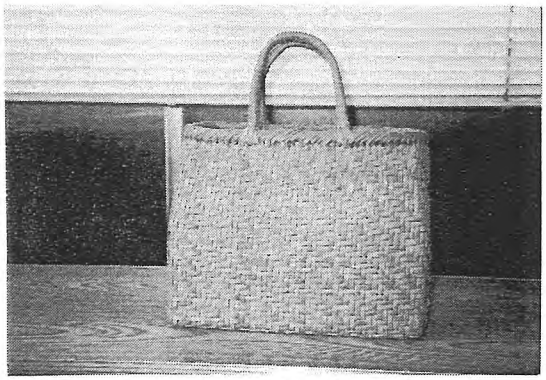
（写真２８）



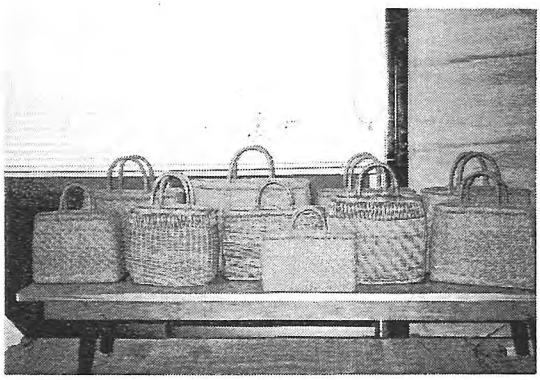
（写真２９）



（写真３０）



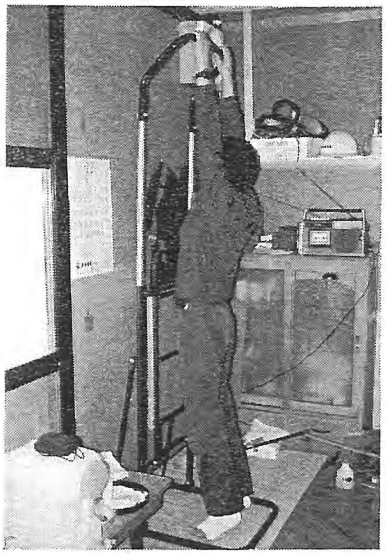
（写真３１）



（写真３２）

ほんの一部ですが，「あけびづる手提げ篭」も作っております。（写真３２）

「つる細工」制作は，一日中座って前屈みの姿勢で作業をするため，腰に負担が掛かることから，腰痛予防のために健康器にぶら下がっているところです。（写真３３）



（写真３３）

4　販売方法等

完成した「つる細工」製品の殆どは，地元のつる組合に一括納入されて全国の問屋に出荷され，我々の製品も三越や高島屋など東京周辺の一流デパートでも販売されております。また，署で実施する森の市やその他のイベントでも僅かですが販売しています。

昨年の販売実績は，１，３７９千円で，一人一日当たり５．９千円となっています。

なお，今年度は卸価格のアップがあり，１月末現在７５０千円の販売額で，一人一日当たり７．２千円となっております。

大井沢地区では，地区住民が長い年月をかけ製品を開発し，技術を磨き，また販路拡大のため東京や大阪で街頭実演を行うなど，苦労に苦労を重ねて今日のブランド品に作り上げて来たという重い歴史があること，また他の地区へこの技術が出てしまえば，地区の冬場の現金収入に大きな影響が出る事が想定されることから，他の地区へ技術が流れ出ることがないよう厳しく製品管理をしており，「ぶどうづる」の採取も，大井沢地区民の材料調達に影響が出ないよう，私達が使う材料は蔵王地区などから採取することや，大井沢地区外では制作しない事を申し合わせするなど，地域との調整を図りながら事業を進めているところです。

当署管内をみますと，「ぶどうづる」が繁茂しているところが数多くあり，ここ数年は事業が継続できるものと思われます。

スライドでもお分かりのように，長時間同じ姿勢で作業を行うことから，腰痛や目の疲れを防止するため，ぶら下がり健康器の設置や随時極力遠方を見たり，林業体操を頻繁に行うなど健康管理に十分気を配りながら作業を進めて行きたいと考えております。

5　終わりに

造林地の「つる」を活用した特定事業は，造林地の厄介者である「つる」の除去という造林地の保育，保護の効果が期待できること，冬期間の有効な事業量の確保が出来ることのみならず，収入の確保が期待できること，更には地域産業の振興に国有林としても貢献できるという一石三鳥の効果が期待できると考えております。

私達は，この特定事業を通じ，地域の人々と協力して新製品の開発や更なる技術の研鑽に努めるなど，地域との共存を図りながら更に地域に密着した，地域に開かれた国有林を目指し，今後も努力を続けて行きたいと考えております。